

〇〇してみました世界のフィールド

ロープウエーで 天空の街をめぐる

よしえ たかふみ
吉江 貴文
広島市立大学准教授



空中散歩をしてみたい

南米最大の銀山ポトシの坑道ツアーに向かう筆者。ポトシは1545年に現ポリビア領で発見され、のちにスペイン帝国に莫大な富をもたらした。手にしているのは鉱夫が採掘のために使うダイナマイトと信管(2007年)

日本の都市で一般的な交通手段といえば、地下鉄やバスなどであろう。しかし南米のボリビアでは街の上空をロープウエーが走る。ロープウエーが日常的な交通手段になるとは、どのような感じなのだろうか。

空を飛ぶ夢

むかしよく、空を飛ぶ夢を見た。道を歩いていると、急に体が軽くなる。気がつくとも地面から体が浮かび上がっており、空中を漂いながら下界の街並みを眺めている。そんな夢である。特に大学院生のころに見た記憶がある。以前読んだ精神分析の本によると、空を飛ぶ夢は抑圧された心理状態からの解放願望をあらわすのだそうだ。将来も定まらず、ストレスにさらされていた院生時代の不安な気持ちこそそんな夢が映し出していたのかもしれない。そういわれると、空を飛ぶ夢を見たあとは、どことなく心がすっきりとして、解放されたような気分を味わえた気がする。就職してからはそんな夢を見ることもなくなっていたのだが、最近になって、ふと思いつき出す機会に出くわした。わたしが人類学的調査のため二五年間通っている街、ラパスの上空を走る都市型ロープウエー・システム、「ミ・テレフェリコ」に乗ったときのことである。



オレンジ・ラインとラパス市街地。ゴンドラの屋根には太陽光パネルがついている (2019年)

天空の街のロープウエー

天空の街、ラパス。南米の小国ボリビアの事実上の首都。アンデス山脈の東斜面、標高四〇〇〇メートルから三三〇〇メートルにかけてすり鉢状に広がる坂の街である。市庁舎のある旧市街地で標高三六〇〇メートルぐらい。ちょうど富士山の九合目あたりと同じ高さになる。そんな高地都市ラパスのあらたな交通手段として、今から六年前に登場したのがミ・テレフェリコである。ちなみにミ・テレフェリコとは、スペイン語で「わたしのロープウエー」を意味する。二〇一四年の開業当初、街の中心地であるセントロと周辺地区を結ぶ三路線一〇キロでスタートしたミ・テレフェリコは、今では一〇路線三〇キロにまで拡張され、市街地のほぼ全域をカバーする環状路線として、毎日朝六時から夜一時まで休みなく運行されている。乗車料金は一路線につき三ボリビアーノス(五〇円弱)。地上を走るミニバスよりは少し高めだが、いつも交通渋滞に悩まされる陸路より、はるかに快適に市内を移動することができる。

ゴンドラに揺られて空中散歩

ミ・テレフェリコは「都市型」のロープウエー・システムである。だからそれに乗ると、ラパス市街のまったなかをゴンドラに揺られながら移動することになる。ゴンドラの進むスピードはおよそ時速一五キロ。眼下にはバセーニョ(ラパス市民)たちの暮らしが広がっている。自宅の



標高差400メートルをかけるイエロー・ライン(上)とミニバスの真上を走るホワイト・ライン(下)(ともに2019年)

パティオ(中庭)で洗濯をしているセニョーラ。建設中のビルの屋上で赤土レンガを運んでいる男たち。色とりどりの野菜や果物を地面に並べている定期市のチヨリータ(先住民系の女性)。そんなとき、わたしの脳裏には「空を飛ぶ夢」の記憶が、デジャブのごとく蘇る。きつと空飛ぶ自転車に跨^{また}がって大空を散策したら、こんな感じにちがいない。かと思えば、標高四〇九五メートルにある七月一六日駅と展望台駅を結ぶシルバー・ラインのゴンドラからは、白雪を抱いた六〇〇〇メートル級の中央アンデスの山並みと、ラパス盆地のすり鉢の底に居並ぶ近代的なビル群との壮大な空間のコントラストを一望することもできる。

そして夢から覚める

そんなラパスの絶景を求めてか、最近では外国人観光客のあいだでもミ・テレフェリコに乗るのがちょっとしたブームになっている。そのためのガイドツアーもあるらしい。かりに二〇路線すべてを乗り継いでも、運賃は三〇ボリビアーノス(五〇〇円弱)。世界に類を見ない、標高四〇〇〇メートルの空中散歩を楽しめる体験ツアーの料金としては格安かもしれない。ただ、空の上からラパスの街並みを眺められるということは、見られる側の住民からすれば大変迷惑な話でもある。じつさい、自宅近くにミ・テレフェリコの駅ができてしまったために急遽、別の地区への引っ越しを決めた一家の話や、路線価の急落により、予定していた家屋の売却を諦めてしまった地主の話など、ミ・テレフェリコにまつわる噂話もちらほら耳に入ってくる。わたしにとっては「空を飛ぶ夢」を正夢に変えてくれた夢の乗り物だが、そんな話を聞くと、いつまでも夢ばかり見ているわけにはいかないような気もしてくる。